
《ボク》と《チート》と、神の代理戦争

バイアティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《ボク》と《チート》と、神の代理戦争

【Nコード】

N42700

【作者名】

バイアティス

【あらすじ】

彼女は《ボク》のご主人さまにして、創造主であり、なによりチートだった。

極々普通の一般人である《ボク》と、神さまにして美少女（笑）な《N》が送る超時空チートストーリー。

この代理戦争（チート戦争）の果てには、一体なにが待つのか、それすら《ボク》には分からない……。

作者の処女作です。

基本思いついた先から更新していくので不定期。

文才はありませんが、生暖かい目で見てやってください。

感想がもらえると参考になります。あと少し執筆速度が速くなったり？

プロローグ

黒だ……

どこまでも続く黒。それが《ボク》が最初に認識したことだ。

黒。黒。黒。

本当になにもない……黒以外の色が（後から思ったことだが、色どころか、物質もこの時はなかったのかもしれない）なにもない世界。

「ああ……」

そんな世界に《ボク》は不安を覚えるどころか、どこか懐かしい気分になってしまった。

何故かは判らないけど、この感覚は……そう、幼い頃に母や父に抱かれた時のような、そんな《安堵感》だ。

「なんで……」

なんでこんな所にいるんだろう？
そんな当たり前のことに気がついたのは、ついこの黒い世界に浸

ってから数分後のことだった。

まず《ボク》がしたのは、《ボク》以外の人間が他にいないかだった。

怖くはないとはいえ、流石に一人でずっとぽつんとしているのは、思ったよりも心細い。

まず《ボク》の視覚内に人がいないのはほぼ確定だろう。

黒しか見えない……と言うか、視覚がきちんと機能しているかも怪しい。つい不安になって自分の手を見ている……あった。自分の成人男性とは思えないか細い手のひらが普通に見えた。

「視覚は大丈夫、と……」

となれば次は視覚外。

自分の声はしっかり聴こえる以上、なにかしら声を張り上げれば他の人間が気づくかもしれない……もちろん、いることが前提になるわけだけど。

「……………っ!」

息を、これでもかと言うくらい吸って声を……

「……………!?!」

……張れなかった。いや、張ろうとして、それが出来なかった。
まるで発声と言う機能を寸前で止められたかのように。

「なんで……」

（それは、あたしが望んだからよ）

答えを期待してつぶやいたわけじゃない。

が、《ボク》の疑問に答える、《ボク》以外の《誰か》の声。

「誰か……いるのか？」

今度は、声は聞こえなかった。代わりに起こったのは……世界の

《崩壊》

ひび割れ砕けていく黒の世界だった。

「んな…っ!？」

一体どれだけの時間がたっただろう。
もの凄く長かった気もするし、はたまた一瞬の出来事のようにも
感じたが。

「あ……」

くらくらする頭を押さえながら見たのは、先ほどまでの黒の世
界とはまるで別物に変わった、新しい世界の姿だった。

どこまでも広がる青空と思わず寝転びたくなるほどに咲き乱れる
花々の絨毯……それはまるで《楽園》とでも呼べば良いのだろうか。
およそ十人中十人が美しいと思うであろう光景がそこには広がっ
ていた。

「君は……」

だがそんな楽園の世界も、いま《ボク》が目になっているものに比
べれば矮小なものだ。

《ボク》の意識の総てを根こそぎ持っていたのは、花畑の中心
……そこに佇む一人の少女だ。

いや、訂正しよう。ただの少女じゃない。美少女だ。なんだか《
ボク》が見ているのも申し訳なくなるほどの美少女がそこにいた。

少女は、そんなボケツとした《ボク》の様子を気にする素振りも見せず、その可憐な唇を震わせる。

「よくぞ来たな我が代行！ 我こそは汝が創造主にして唯一無二たる、貴様の《ご主人さま》である！！」

……訂正しよう。

そこに居たのは美少女ではなく、美少女（笑）だった。

進まない、進めない　ボク　（前書き）

うん。

今回も駄文なんだ。

話しが進みません。

進まない、進めない　ボク

美少女（笑）こと《N》は、彼女曰く神なのだそうだ。

……いや、もちろん《ボク》だって最初から信じたわけじゃない。誰だって、いきなり自分は神なのだとか言われても、（は、なに言ってるの？）、（頭が可哀想なんだね）とか思うだろう？

だから《ボク》がなにか証拠はあるのかと聞いたのは決して間違っ
ってはいないだろう。

……まあその後「じゃあこれが証拠ね」とか言って、《ボク》が
中学から大学（つまりは今現在）まで書き溜めてた黒歴史……厨二
病的な《アレ》を分厚いノートで、わざわざ編纂して晒された辺り
から、彼女を（ほぼ強制的に）神だと認めるに至ったわけだが。

「ああ、ちなみに神と言っても邪神の類だと思っている。いや、常識的に考えて」

「だから悪かったって言ってるじゃない！　いい加減いじけるの止

めなさいよ!」

「だが断わる」

勝手に他人の黒歴史を暴くような奴は邪神と呼ばれても仕方ないと思う。

と言うわけで、《ボク》は現在、絶賛いじけ中だ……が。

……ズンッ!

「……………は?」

鈍い音と衝撃と共に《ボク》を中心に周囲およそ三メートルほどが《消失》した。

……あー、なんだろう、このジーンギスカン鍋的な状態?

「いい加減にしろよ？ この駄目人間」

「Yes、ma'am!」

……うん、神さまに逆らうのは良くないよね！ てか無理だ。

まあ、その後はわりとさくさく話が進んでいった。

《ボク》が下手なことを言わなくなったからだろう。ほぼ彼女《N》による独走状態で話しが進む。

………およそ一時間後。

彼女の説明は正直な話し、一般人——それもただの学生でしかなかった《ボク》には小難しくて全てを理解するのは難しかった。が、とりあえず分かったこと……《ボク》がある程度理解出来たことだけ、あらためて一度整理してみよう。

まず一つ目。 N 自身が語る、彼女という存在と、そして 神 というものの定義。

先程から彼女—— N を神と言っているが、正確には少し違うらしい。

まず彼女のような存在を、彼女自身は 創作者・クリエイター と言うらしい。安直だが分かりやすい。そして 創作者・クリエイター が定義するところの 神 とは、全智全能をも超越する存在、ひいてはそれに準ずる存在を指すらしい。

神 の定義にも感じることはあったが、それ以上に驚くべきは、彼女のような存在 創作者・クリエイター は無数に存在していて、それぞれが独自の世界を創り見守っているらしい。

……正直 N のような存在が他にもいることには、ある意味戦慄した。もちろん黒歴史の一件のことだけど。

二つ目は、ボク についてだった。

まず、どうして ボク が此処にいるのか。これに関しては N はただ一言だけ「お願いしたいことがある」の一点張りで、細かいことは教えてくれなかった。

……ああ、この話しの過程でもう一つ分かったことがあったんだ。った。

それは、この楽園の一つ前。黒の世界についてだ。どうもあの世界（と言うか、こっちの世界も含めてだが）は、ボク が心の中で思う一番安心できる空間を N が具現化したものだったらしい。だとすればあの安堵感も当然のこと……なんだろう。

うけど、黒の世界が一番安心できるって……引きこもりの気はない
と思っただけだなあ……。

蛇足だけど、いきなりあの世界が砕け散った理由は N の「な
んだか辛気臭くって」ということだったらしい……それだけで世界
一つ砕けますか。やっぱ邪神だ。

三つ目は、わりと個人的なものだ。つまりは——最初と口調変わ
ってね？ あと、なんでご主人さま発言？ ってことについて。

最初の一つは簡単だった。「最初に威厳をもって威圧感を与えて
おけば楽になるかと思って」だそうだ……ふざける。

なんでやめたのって聞くと「あんたみたいなヘタレには無駄な威
厳とかいらなかなーと思って」だそうだ……ヘタレですかそうで
すか。

色々言いたいことはあるがやめておく。ボク だって命は惜し
いんだ。笑うなら笑え。

ご主人さま発言については、これもよく分からなかったが、どう
も ボク は彼女が創った世界の中から独自の基準で選びぬかれた
人間だそうだ。

N たちは 接続者・コントラクター と呼ぶらしいそれは、
簡単に言えば生命体としてのランクを数段階すっ飛ばして N た
ち 創作者・クリエイター の直接的な下僕にするものらしい。て
か下僕ってなんだ下僕って。

「下僕は下僕だし、あたしがご主人さまだっていう事実なんら

変わらないからどうでもいいでしょ？ それともなに。なんか文句でもあるわけ？」

「むしろ文句しか……」

「黒歴史ばらすわよ（ぽそ）」

「なんなりとお命じくくださいご主人サマー」

まあ、こんなだろうよ。

「それじゃま、そろそろあんたにしてもらうことを教えてあげようと思うわけだけど？」

「……やっとか」

前振りがいやに長かった。

読者も飽き飽きしてくるだろうに……読者って誰だ？

「あんたにしてもらうこと、それは……」

「……（ぐく）」

……何となく、わかってたんだ。
前振りが長かったのは、偶然じゃない。わざとだってこと。

理由は知らない。

緊張させたくなかったから？

ボクを？ あるいは……彼女自身が？

そんな考えが頭をよぎる……はは、厨二病乙かな？ 妄想が過ぎる？

けどそんな考え今はどうでもいい。

そして、 N が言葉を紡いだ。

「それは……創作者によって選ばれた代行たちによって行われる、
たった三名のみを選出するためのバトルロワイヤル—— 神代
戦争よ」

神代戦争　そして決意の　ボク　（前書き）

今回はちよつと長くしてみました。

ちよつとだけ戦闘描写が。

まあ主人公関係ないけどね。

追伸。 十二時には間に合わせたかった……

神代戦争 そして決意の ボク

《神代戦争》

神の代理で戦争をするから、略してそのネーミングらしい。

……正直どうかと思うが。

「つつこむべきところがまずそこからなの？」

「……いや、つい」

「ま、いいわ。続きを説明するわよ」

「よろです」

「神代戦争 の起こりの起源がいつなのかは不明。けど、その存在意義はあたしたち 創作者 にとっては非常に重要度が高いものなの。それはこの戦争の勝利者が新しい世界の創作の優先権を得るから」

優先権？

「創作者 は自らの力でどんな世界でも創作することが出来る。けど創作できる世界の数には限りがあるの。大世界と小世界……あたしたちが創作する世界って言うのは、認識としては大きな一つの泡の中に、新しく小さな泡を作ることと同義なのよ」

……先生、例えが分かりにくいです。

「新しい世界が増えるたびに既存の世界が圧迫され軋み……最悪の場合は崩壊する。それも崩壊は一つの世界に止まらずに、より近い範囲の世界も巻き込むの。そしてその連鎖が続けば、いずれは大世界そのものを破壊しかねない」

シカトですかそうですね。けど……

「それって結構やばいんじゃないのか？ 創作者 っていうのはNの説明通りなら結構な数があるんだろ？ その大世界とやらの容量は知らないけど、仮に十の 創作者 が十ずつ世界を作り出すと仮定して百の世界。その十倍なら千の世界。倍々ゲームじゃないけど、なかなか相当な数になるぞ？」

「実際には 創作者 の総数は軽く億は超えるわ。創作される世界の数も、あんたの仮定した数の数千倍以上」

マジですか。

「大マジよ。事実の小説より奇なりってやつ。今のところは大世界の容量もまだまだ持つって予想だけど、それが何時まで持つかは分からない。だからこそ 神代戦争 が始められるようになったわけ」

「世界の創作の優先権って奴か。世界を創れる奴の数を限定して容量を超えないようにする……って、それでも何回も繰り返したら何時かは容量がいっぱいになるだろ？ 数を限定しても増えることに変わりはないんだから」

ボク が言っ た言葉に対してNは何だか意外そうな顔をしてい
る。

どうせ ボク が言っ た意見に対して、「良く分ったわねこの凡
人」とか言いたいんだろう？ …… 自分で凡人って言うのも意外と
堪えるね。

「違う違う！ 素直に驚いただけよ。意外と理解力あるんじゃない。
だてに黒歴史を背負ってきてるわけじゃないのね」

「褒められるのはいいけど黒歴史のことは余計だよ！」

「はいはい。で、さっきの疑問だけど。 神代戦争 があたしたち
にとって重要な意味を持つもう一つの答えがそこ。 この戦争で勝
った 創作者 には優先的に世界の創作権利を得る、そして負けた
創作者 も数は相当数限定されるけど、実際には創作するのは許
可されてるの」

え？ でもそれだと……

「黙って最後まで聞く。 確かに敗者にも世界を創作する権利は残
る……ただし、これまで創ってきた世界を全て—— 破棄するっ
ていう条件でね」

「破棄…… ってそれまさか」

「…… 文字通りの意味よ」

大世界の容量が超えないために、既存の世界を消す。

敗者が創った世界が全て破棄されるってことは、当然、ボクの居た世界も消えるってことで……それはつまり ボクの家族や友達もみんな……

「だからこそ負けられないのよ。あんだだって嫌でしょ？自分の大切なものが消えて無くなるなんて。あたしだってそう。世界はあたしの子供そのもの。慈しみ愛する存在。あたしのこれまでの歴史そのもの……とても大切なものだから」

……なんだよそれ。ふざけんなっ……！

「……拒否権はあんたに無いって言ったけど、一応聞いておくわ。どうする？」

「どうするもなにも……拒否できないだろそんなの！」

世界の人類全てなんて言わない。けど、父さんや母さんたちが消えて無くなるなんてそんなの、認められない……！！

Nは ボクの言葉を聞いて「ふふ」と小さく笑った。

「上出来よ。その言葉、信じるわ」

「戦争には参加する。けど、参加って言っても具体的にどうするんだ？ 言っとくけどボクは見たとおりの文学系で、喧嘩だってまともにしたことないんだからな？」

自慢じゃないが ボク はこれまでの学校生活で体育はほぼ見学しているほどの運動音痴かつ病弱、当然ながら部活動は文化系。高校にいたっては帰宅部というありさまだ。

貧弱ここに極まれりと言っても過言ではない。

「……ほんとに自慢できないし、普通自分で文学系なんて言う？ まあ、言葉で言っても分からないでしょうね。だからここからは手っ取り早い方法を取らせてもらおうよ」

そう言つとNは右手に水晶玉のようなものを出現させ、それを上に掲げた。

「これからあんたが参加する戦争の——その一端を見せてあげる」

水晶玉から白い閃光が溢れだし、瞬間、弾けた。
そして世界が反転する。

其処はもう先程までの楽園のような世界じゃなかった。

まるで夢遊病のような感覚で、ボクはその光景を見ていた。

其処は銀河。

無数に瞬く星々が煌く静寂の虚空。

対峙するのは二つの巨影。

銀河を戦場とするに相応しい超滅の権化。

一つは燃え盛る恒星を背にした巨大な戦艦あるいは要塞。

その外観は翼を広げた巨大な猛禽のようだ。頭部はなく代わりに胴体部分には巨大な球体が埋まっている。逆に翼や脚に当たるべき部分からは高層ビルも真つ青になるほどの大きさの柱状の物体が幾十数本もそそり立っており、そこからさらに別の柱が針山の如く生えている。

そしてもう一つは、対峙する猛禽と同様……いやそれ以上の巨軀を誇る常識を超えた樹木だった。

ただし通常の樹木とは違い、その表皮からは水晶状の物質が無数に突き出ており、枝葉は常に蠢いている。根の部分に至っては光る球状の何かを守るように無数に束ね絡まっている。

その巨大な威容を誇る両者は、互いの手を読み合うように、微動だにせず……しかしその巨軀に纏わりつくかのように次々と新しい影が出現する。

それは己の手足であり、牙であり爪であり、己を守る守護者たちだ。自らの主とよく似た姿の無機物と有機物の兵たち。破壊の権化

たる超兵器。

語らずとも分かりやすい敵対の布陣。

お互いを確たる敵と見なし、撃滅するための戦の形。

どれほどの時間が経過しただろうか。

ボク の感覚では数十分、しかし実際の時間はそれよりも短い
のだろう。

互いの軍勢が京の位に達した時、まるで打ち合わせたかのように
同時に動き出し、それは始まった。

.....ッ
!!!!!!!!!!!!

無音の閃光と共に、宇宙に新しい太陽が誕生した。

猛禽と巨樹が互いに持ちうる全ての爪牙が、幾億の閃光となって
相手を穿ち、抉り、削り、破碎し四散させる。

それは勿論のこと、今や京の軍勢も己の役割を果たすべくその威力を発揮する。

もはや弾幕などと言うレベルを超越し、破壊の津波と化して周囲の星諸共に喰い散らかしていく。

この一瞬で発揮し消費された総エネルギー量は既に小銀河十数個分にも至っただろう。

未だ互いに致命傷はない。だが、砲撃の苛烈さ放射の数では猛禽の方が僅かばかりか上だろう。明らかに巨樹の軍勢の方が被害が多い。

主と同じ仕様なのだろう猛禽の守護者も、巨樹の僕に比べ砲撃の威力は大きく射線も過密だ。幾つもの光線に貫かれて、次々と戦線を脱落していく巨樹の兵たち。

この激しい戦争は猛禽の勝利で終わると、ボクは思っていた。
……この時ばかりはだが。

「おいおい……」

驚きとかそういうのを通り越して呆れの言葉。

ボクが見たのは破壊され四散爆散し、虚空の塵となる運命だと思っていた巨樹の新たな行動。それは、相手の爪牙によって破壊されたはずの樹皮が内側から蠢き湧き立つ真新しい樹皮によって塞がっていく姿。

即ち…… 再生

そしてそれは巨樹のみならず、破壊されたはずの巨樹の僕たちも同様だった。

繰り返す、繰り返す。

双方、最初の砲撃から一向に衰える様子のない砲撃の応酬。

猛禽が穿いて、抉つて、貫いて破壊する。

巨樹は穿たれ、抉られ、貫かれ再生する。

繰り返す、繰り返す。

終わらない破壊の舞踏だ。

[illegible]

破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。再生。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。破壊。再生。再生。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。再生。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。再生。再生。破壊。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。再生。再生。再生。再生。破壊。再生。破壊。再生。
破壊。再生。再生。再生。再生。再生。再生。再生。！！！！！！

だが、その応酬も少しずつ傾きを見せ始める。

猛禽の砲撃回数が減っている。少しずつ、本当に少しずつだが確実に減ってきている。

当然だろう。

確かに猛禽側の砲撃の威力、射線の数、一度の殲滅能力は巨樹を上回っている。だが巨樹は破壊された分だけ再生を繰り返し、逆に猛禽の数をわずかず削っていく。

猛禽側に再生という機能がない以上は、もうどうにもしようがない。いずれ来る破滅をゆっくりと、じわじわ味わいながら罅られ続けるだけだ。

そこからの展開は早かった。

幾度もの破壊と再生を繰り返し、遂に戦線を維持できなくなった猛禽側の戦陣。その穴に巨樹の僕たちが浸透し逆襲と言う名の侵食が始まる。

そこからの猛禽の奮戦は健気ではあったが侵食を止めるには遠く及ばず……最後は猛禽本体の装甲表面に取り付き根を植え付け内部へ侵入。

僕たちは本来の機能である敵対行動体への寄生と略奪・凌辱を開始する。

猛禽は己の体内へ入り込み次々と発芽するそれらに対抗する術はなく、結局、内側で発生した膨大な圧力と暴力に耐え切れず爆散した。

猛禽の破滅とともに、目の前の光景が消え始めていく。

瞬きした次の瞬間には、もう元の楽園の光景が広がっている。

「しっかり見たでしょうね？ あれが 神代戦争 よ。ちなみに前回の最終戦の記録映像」

「あれが……」

あんな規格外なのに参加するって言うのか ボク が……

「本当にやれるのか？ ボクなんか……」

「ふん！ あんたはこのあたしが選んだ、あたしの 接統者 なのよ？ なら出来ないとは言わせない……てゅーか言ったらどうなるかわかってるんでしょうね？」

大した自信だよ。勝手に選んで呼びつけて、こんな面倒で怖そうなことをさせようとする張本人が。

……でも、その台詞には ボク もそして自分さえも偽り疑うような響きはまるでない。本当に、 ボク に出来ると信じているよ

うに。

「……勝ち進める保証なんて、ないからな？」

「安心なさい。絶対に勝たせてみせる。なんたつてあんたのご主人さまですから！ 下僕のフォローくらいはちゃんとするわよ」

下僕つてところは決定済みなんだなあ……

でもまあ、不安は消えた……かな？

「それで？ まずボクはなにをすればいいんだ？」

「戦争を始める前に色々準備することはあるけど、まず真っ先にやるべきことがあるわ」

「やるべきこと？」

「戦争してる間のあたし達のホームになるべき所。つまり——
——本拠地作りよ——！」

拠点作りとメイドと ボク (前書き)

新キャラ登場です。

結局まだ拠点作りには至ってません。代わりにメイドが出ます。

月々火あたり投稿できそうな感じではないので早めに投稿です。

拠点作りとメイドと ボク

「本拠地作り？」

「そ。あんたがさっきまで見てた映像にも映ってたでしょ？ 無駄にでかい木と鳥もどき。あれがそうよ」

ああ、あれか…… って、あれを作るのか！？

「接続者 なら誰もが最初に行う作業よ。まあ戦争中は本拠地を拠点 っていう言葉で統一して呼んでるわね。意味は同じだから言いかえる必要性はあんまりないけど」

……ん？

拠点を作る……

「あのさ、拠点って最初からある程度用意されてるものじゃないのか？」

「違うわ。文字通り一から作り上げるのよ。基本的な骨組みから拠点として必要な内装・外装の全てをね」

え、なにそのマゾゲー？

いくらなんでも初心者には無理だろそんなの。拠点どころか家の造り方だって知らないよ。

なにかヒント的なものはないの？ と、ボク がそう聞くと、

「ヒントじゃないけど、ジャンルとしてなら幾つもの形態が存在し

てるわよ。例えばさっきの樹木型なら 有機生体装甲型自律成長要塞タイプ だし、猛禽のほうは正統派の 全域砲撃型機動要塞戦艦タイプ って感じにね。ま、どちらも馬鹿みたいに独自のアレンジを入れてたけど」

なるほど……でもそれなら、前回の勝利者の拠点を参考にすれば——悪い言い方をすればパクってしまえば——そう考える ボクに、「でもね」と釘を刺す。

「拠点はある程度のジャンルの類似はあっても一つとして同じものは存在しないの。それは、それぞれの 接続者 個人の想像力が関わってくるからよ。これは拠点作りだけでなく、その他の戦闘用機構……艦船だったり戦闘生物だったりね、それらにも適用される」

なるほど……仮に ボク があの樹木や猛禽を参考にして拠点を作ったとしても、外見は同じでも内容がまるで別のものになると。確かに他人の想像で拠点が作られるんなら、何を考えてそれを作ったのかってのまでは真似しきれないもんな。

それだけじゃないわ、とNは説明を続ける。

「拠点の製造を 接続者 の想像力に任せる理由は、これがある意味一番大事なんだけどね、 接続者 が考える最高の守りを具現化するっていうのがあるの」

最高の、守り？

「 神代戦争 での勝利条件の一つが敵拠点の陥落。つまり言い換えればこちらの拠点が落とされればあたしたちの敗北ってこと。拠点を作るにあたって 接続者 がどんな考えで、どのような守りを

選択したかによって難易度は大きく違ってくる。……ほら、本拠地作りの重要さが、これで理解できるでしょ？」

……なるほど。

「さて、作業するにあたってあんたには三つ大事なことを教えるわ」

「大事なこと？」

「大事なものって言ってもいいわね。まずはこれよ」

そう言つてNは手の平に乗るほどの大きさの黒い立方体を出現させる。

黒い立方体——見た目はボクの持っている知識の中で一番近い表現では、ルービックキューブに近いだろう。その表面は非常に滑らかでまるで鏡のようだが、よくよく見れば表面上には幾つもの幾何学的なラインが走っている。

その黒い物体は光を反射することなく逆に吸い込むかのような印象をボクに与える。

「これは？」

「真説・第一永久機関 スフェーン・イリアスタイル——通称 S・Y・R（スィール）、これから行ふ作業のほとんどがこれを通して実行されるわ」

N曰く、真説・第一永久機関 S・Y・R とは、文字通りの永久機関らしい。

ここで永久機関の定義について説明するとして。

永久機関とは外部からエネルギーを受け取ることなく、仕事を行い続ける装置の総称だ。

そして永久機関には大きく分けて二つの種類がある。

一つは、 第一種永久機関

第一種永久機関とは、外部から何も受け取ることなく、仕事（運動エネルギーとも言う）を外部に取り出すことができる機関のことだ。永久機関という定義そのものを表すものでもあるだろう。しかしこれは、熱力学第一法則——つまりはエネルギー保存の法則だ——によって否定されている。

もう一つは、 第二種永久機関

これは上記の熱力学第一法則を破らずに永久機関を実現しようとしたものを指す。これは仕事を行う部分を装置内に組み込み、ある熱源から熱エネルギーを取り出しこれを仕事に変換し、仕事によって発生した熱を熱源に回収するという仕組みなのだが、こちらは熱力学第二法則によって夢破れた。

……さりとてうんちくと垂れ流してみただ、まさか某大規模情報サイトで得た知識がここで役に立つとは……うん、WOKO先生ありがとうございますってところだね。

どちらの永久機関も ボク が居た世界では理論こそ幾つも唱えられ、何人もの科学者・技術者が挑み、そして未だに完成する見込みのない、まさしく夢の装置と言っていい代物だ。

ではNの言う真説・第一永久機関 S・Y・R はどうかと言うと、どうも ボク が語った永久機関どちらとも似ていて全く別物のようだ。

S・Y・R はそれを構築する素材そのものがある種の超高密度エネルギー結晶体で造られており、常に一定のエネルギー量が維持・保持されているらしい。しかもそのエネルギー量は下手な恒星なんかよりも純粋なエネルギー体としては比較にならないほど——

——桁にすると0が後ろに数個ほど——高いそう。だが真に驚くべきはそこじゃない。この S・Y・R は仕事に必要なエネルギーを消費しても、その消費したエネルギーが初期の数値から減らないのだそう。

意味が分からないかな？ つまりはこうだ。

100（初期数値） - 100（消費数値） = 100（現在数値）

……自分で言ってもわけが分からない。

完全に矛盾している。確実に減ったはずなのに、実際には減っていない。

まさしく矛盾だ。

そして、そのことをNに質問して返ってきた答えがこれだ。

「あたしたち—— 創作者——が、そういう法則を新しく創ったから」だと。

ここまで非常識かつ規格外な光景を目にしていた ボク だった

が、まだ理解が甘かったらしい。

相手は世界すら創造する 創作者、既存の法則や理論を無視した新しいルールを生み出すことすらも、Nたちにとっては難しいことではないようだ。

「……このチートめ」

「一応、神さまですから」

ふふん！と無駄に自慢げに胸を張るN。

「で、これをどうしろと？」

「手、出して」

こうか？ Nの言うまま手を差し出すと S・Y・R を ボクに握らせた。

「持ったわね？ じゃあ目を閉じて。 S・Y・R に意識を集中して……その中に自分が入り込むイメージを持つのよ？」

また無理難題を、と思いつつも ボク はNの言うがままに実行する。

「えーと……目を閉じて……意識を集中……中に入り込むイメージで……集中、集中……っ!？」

言われた通りに S・Y・R を握って念じていると不思議な浮

遊感が現れた。頭の中がぐらくらするような……そんな陶酔感。

そして――

「どう？　なにが見える？」

「えーと……なんて言えばいいかな？　ゲームのステータス画面？
……みたいな？」

目を閉じているはずなのに　ボク　の目はその光景をしっかりと認識していた。

それはいま　ボク　が言った通りの、まるでなにかのゲームのステータス画面のようだった。
ちなみにイメージ化するとこんなのだ。

接続者　総合情報

接続者名　　：　ボク

接続者オーナー　：　可能性のN　　：　閲覧不能

接続者　総合LV：1

拠点　LV　　：0

内政技能　LV　：0

軍事技能　LV　：0

開発・生産　LV：0

現在保有戦力　　：0

現在所持pt　　：200,000pt

各種技能 コマンド

内政技能 : 取得数 0 : 取得可能数 5

軍事技能 : 取得数 0 : 取得可能数 5

固有技能 : 取得数 1

開発・生産 コマンド

開発 L V : 1

生産 L V : 1

てかまんま何かのゲームのステータス画面みたいだ。

……ん？

……おい、ちょっと待て。

「なあ、N？ 接続者名つてところなんだが……」

「なによ」

「なんで ボク の名前が ボク なんだよ！？ 名前じゃないよこれ！ むしろ一人称だよ！！」

これが名前だとしたらそれはそれは恥ずかしいだろう。

友人や知り合いからは ボク 君とか ボク さんとか言われるのだろうか？

ああ、いやこれが中華の人だったら違和感はないが、あいにくはれっきとした日本人である。

「ああ……バグかしらね？ いいんじゃない別に。 あああああ

とか適当な名前つくよりはマシだと思いなさいよ」

「ざけんな！」

人の名前をなんだと思ってる！

ボク の名前は——！！

「いいから先説明させてよね」

名前すら言わせないつもりかよ！？

本当に可愛いのは見た目だけだなこの邪神は！

「はいはい……じゃあ説明するわよ」

「……………もうどうとでもすれ」

この先もこんな扱いなんだろうか？

そうなんだろうなあ……

「まず 接続者 総合Lvってやつね。これは下の項目にもある
内政技能 や 軍事技能 を合わせた文字通りの総合でのLvよ。
この総合Lvが高いだけさらに下にある項目 固有技能 ってのが
開示されていくの」

「固有技能って？」

「 接続者 が個人個人で持つてる技能のこと。ま、言っちゃえば
当人が得意としていること——趣味とか特技とか——がこれに反映

されてくるわね」

ほうほう。

「内政技能 や 軍事技能 って言うのは、拠点や戦力の 開発・生産 に関わってくるわ。例えば 内政技能 の中には 生産能力 上昇 っていう戦力開発関係または 思考速度上昇 なんてあんた自身の能力を上げるものもある。 軍事技能 は戦闘関連のものばっかりだけど……ま、今は内政のほうに集中したほうがいいでしょうね」

いきなり面倒くさそうだな……で、この 所持P t ってのは？

「これは内政から軍事の技能取得、新しい施設や戦力の開発・生産にかかわる非常に重要なものよ。技能も開発も全部消費P t が設定されていて、自分や戦力の能力増強は今持つてるP t 以内に収めないと駄目なの。P t 自体は後から取得する方法はある。でも……無駄遣いは出来ないのは理解できるでしょ？」

持つてるP t で自分や戦力の強化の仕方が限定されてくるってわけか。これもやり繰りを間違えたら難易度が大幅に変わってくる、と。

「本当はもっと詳しく説明する必要があるんだけど、いまのあんたにはあまり関係ないわね。最初に必要になってくるのは 内政技能 と 開発・生産 だけだし」

「だけって言うけど……その内政技能とやらは大体いくつぐらいあるんだ？ それによってやり方を色々考えなきゃいけないんだけど？」

今あるPtは200,000。だけど技能の取得や開発にPtを
幾ら消費するのかによって、ボクの 神代戦争 での戦い方は
大きく変わってくる。

「そうねえ……技能だけでも、ざっと五千種類ぐらい？ 派生を含
めたら一万は軽く超えるんじゃないかしら？」

……………へえ、五千種類ねえ。

「……………死ねと？」

いやいや無理だろ！？

今時のやり込み派ゲームでもそんな数の技能なんてないよ！

ボク に廃人になれと！？

そんな ボク の嘆きを予想していたかのようにNは不敵に笑う。

「安心しなさい！ そんな一から十まで全部あんた一人にやらせな
いから！ そこで大事なものの最後の一つの登場よ！ さ、出番よ。
来なさい」

そこには一人の女性が立っていた。

歳は18〜20位だろうか？ 黒い髪を白の紐で簡素に結び、古
式ゆかしいメイド服に身を包んでいる。背は ボク ほどではない
が女性にして高くNよりも頭一つ分ほど大きい。が、なにより特徴
的なのは、その胸だろう。

巨乳だ。巨乳である。大事なことなので二回言ってみた。

彼女の隣に立つNが可哀想になるくらいにスタイルが良い。

うん、巨乳万歳！と言っておこつ。Nは……ハハ、残念賞？

「アッハハ……」——ぶっ殺すわよ？」

「申し訳ありません」

土下座ですよ、ええ。

下手なことを言えばヤラれる——そうでなくとも黒歴史を握られているのだ——平謝り。完全なる平伏のポーズであり土下座のスタイルだ。

そんなボクの情けない姿を見て、黒髪のメイドは「クスクス」と楽しそうに笑う。

くっ……情けない。Nはともかく、よりによって巨乳美人にこんな姿を見せるなんて……！！

「まだ言うか！」

——失敬。本題に戻るとしよう。

「それで……彼女は？」

「はじめまして若さま。私はNさまにお仕えする作業全般サポート用生体人形、個体識別名を マーテル と申します」

そう言つて彼女はその挙動に一切の無駄のない、それでいて瀟洒な動作でおじぎをする。ボク もそれにつられてぺこりと頭を下げる。

それで、えつと……作業全般サポート用生体人形って？

「はい。作業全般——拠点作りを始めとして、開発・生産・建築・運搬・兵力増強なんでも。全ての分野において若さまの助けとなるべく 創作者 の方々に生み出され使役される存在——それが私でございます」

おお！ それは助かる！！

でも人形って……全然そんな風には見えない。
どこからどう見ても人間そのものだ。

特に胸が。

「まだ言うか……！」

「ウフフ、ありがとうございます。ですが、 magari なりにも N さまの創りだした存在ですから、外見は人そのものであっても中身は別物なんですよ？」

そうなんだ……ところでさ。

「はい？」

「その……若さまって、なに？」

さっきからいつ突っ込みを入れるべきか迷っていたが、切り出してみた。

若さまって……恥ずかしいんですが。しかも見た目美人なお姉さんに言われると、その、なんだ……照れる。

「お嫌でしたか？」

涙目&上目遣いのコンボがキター！？

無理だ。ああ無理だ。これは耐え切れない。

心が痛い……！

でもなんだろう……その表情をもっと見ていたくなる　ボクが
いる……って違う違う……！

「ああいや！　そうじゃなくって、その……もっと別の呼び方とか、
えっと……！」

ボク　が慌てて弁解しようとする　とマーテルさんは、

「フフ、冗談ですよ？」

と悪戯が成功した子供のような顔をする。

「そうですねえ……若さま、とお呼びする理由ですが——私の本当
の意味での主は、結局のところNさまです。ですが、新しくお
仕えするお方に失礼のないよう、それでいて敬意を持った呼び方を
と考えまして、若さまと」

ウフフ、と笑うマーテルさん。

「本当は最初、ご主人さまって言う呼び方も考慮していたのですけ
ど、Nさまに「ご主人さまはあたし！　あいつは下僕なの！」と言
われてしまいました……フフフ」

ご主人さま！

全国津々浦々の紳士諸兄らが渴望してやまない響き！　漢たるも
の一度は呼ばれたい呼び方ぶっちぎりの一位……！

そんな漢の夢が、可能性が……潰されていたなんて！

畜生っ！ Nはやっぱり邪神だ！ ド畜生お……！！

ダンッ！ と、ボク はへたりこんで、万感の思いをこめてこの行き場のない怒りを地面に叩きつけた。

「なにやってんだか」

「ウフフ、でも面白い方です。それでこそ私がお仕える甲斐があるというもの。駄目な主に仕えるほどに従者の質はより映えるというものですから」

先ほどとは違う意味で地面にへたり込む。
美人に駄目とか言われた……死ぬう。

「あらあら……申し訳ありません若さま。ですがお仕える甲斐があると言うのは私の素直な気持ちですよ。やはり従者としては主さまはつまらないよりも面白い方のほうが楽しいものですから」

「マーテルさん……」

「ですから、これからよろしくお願いいたします。若さまがこの戦争を勝ち進めるよう、このマーテル、最大限のサポートをお約束いたしますわ」

なんだろうな……他人に激励されるとこんなに嬉しいものなのか。さっきのあのうんざりするような絶望感が何処かにいったみたい
に心が軽い。

これが……メイド力って奴なのか。

「はあ？ なに言ってるんだか」

「るっさい」

テンションが上がる。

メイドの力は偉大なり！ 今の ボク なら拠点作りだろうが、
技能の網羅作業だろうが、やれる気がする！！

それじゃあ……早速作業に取り掛かりますかっ！

———と言おうとした辺りで、ぐー……、となんと気の抜ける音がした。

発生源は、 ボク の腹だった。

「アッハハハハハ〜！！」

「クスクス——では作業の前に、まずはお茶にいたしましょうか？」

「……はい」

なんだかとても穴に潜りたくなった今日この頃だった。

人物・拠点紹介にして 外伝（前書き）

来週書けるかわからないので。

1～4話までの登場人物と3話でちょっとだけ出た拠点の情報なんか書いてみたり。

追伸、感想でこんなチート能力あったらいいね。つてのがあれば、ぜひ書いてみてください。参考にしたいなー……なんて。

人物・拠点紹介にして 外伝

・ ・ ・ ・ ・

—— おや、お客さんかね？ これは失礼。こんな場所を訪れる人間など中々いないものでね。気付くのが遅れてしまったよ。いやはや。

折角の出番であり、なにより明確な形を持ってこうして現れる機会など、そうそうあるものではないというのにな。

ワタシの事が気になるかね？

ふむ特別いまの君たちが知るべきことではないだろうし、知っていたところで得になることも無いと思うのだがね。

いやしかし、個体識別を明確にするという行為。名を名乗るという行動はワタシにとっては始めてのものであり、良い経験となるであらうことは明白。

よろしい、名乗るとしよう。

ワタシの名前はそう……仮に ドロツセルバルト とでも名乗っておこうか。 大いなるB、 絶対たる運命のB の今世におけ

る影にして仮面……この虚構の世界の観測者にして、お伽噺の王。
以後お見知りおき願うよ、親愛なる 観測者 諸君？

「あの……さつきから誰に向かって喋ってるんです？ そんな独り言みたいにぶつぶつ……」

状況を説明しよう！ ボク はNとマーテルさんとお茶を飲もうとしていたら、気が付いたらこんな場所にいて、なおかつ目の前には独り言をぶつぶつ呟いている紳士風の変人が目の前にいた……さっぱりわからないだろう？ ボク にもさっぱりだ——と、そう言いたいのだろう？

「生憎と今日の君には出番らしい出番はないのだよ主人公（仮）君？ 君には聞き手になってもらうために、こうして呼び出したのだからね」

「うお！？ ボク の居場所が取られた……！？」

地の文は君だけの特権ではないのだよ？

「て言うか主人公（仮）って……なにより聞き手ってなにを聞けばいいんですか？ え〜と、ドロツセルバルトさん？」

「ふむ良い質問だ。なに大した事ではないさ。今日はそう——
本編 で登場した人物の紹介などをしておこうと思ってね。ただの気紛れではあるが、よい案だとは思わないかね？」

「メタ発言ですね……しかも人物紹介って、まだ ボク とNとマーテルさんの三人しかいませんけど？」

メタ発言？ ははっ……知ったことではないね？
それに三人もいれば十分だろう？ それに人物紹介だけではなく、
登場した 拠点 についても多少説明させていただこうと思っている。

「そ、そうですね……」

「では早速紹介していこうか」

時間はなにより貴重だよ。
文字数も貴重ではあるがね？

まずはこの喜劇の主役を紹介するでしょう。

名前： ボク

種族：人類

年齢：20 性別：男

イメージカラー：黒

創作者 N によって 神代戦争 の参加者として呼び出された

接続者・コントラクター

身長は177センチくらい。体重60キロくらい。

出身地は日本のどこか。

髪を染めたりピアスの穴を開けてみたり、なんてこともしない（
と言つかやらない）実に平凡な日本男児。

某大学の学生であり、勉強は可も不可もなく。が、体力はない。オタクと言えるほどのめり込んでもいないが、アニメもゲームも好き。が、一番好きなのはライトノベルの類のようだ。

頭の中だけの世界を創作するのが得意であり、中学生の頃から頭の中で思い浮かんだアイデアをメモ帳に取るのが癖になっている。最初はNに一目惚れでもしたかのような描写がなされたが、そんなことはなかった。むしろ今は「この邪神！」などと思っているくらいである。

隠れ巨乳好き。

「ふむ、こんなところかね？ 実に平凡だ。平凡が過ぎて逆に素晴らしい」

「うるさいよ！ あと隠れ巨乳好きって……」

事実だろうか？

「……そうだけどさ」

「黒歴史について詳細に語ることをしないワタシの優しさを享受したまえよ？ では、次だ」

「（こいつつぜえー……）」

名前：N

種族： 創作者

年齢：？？（外見は16〜7才くらい） 性別：女
イメージカラー：緋色であり黄金

創作者・クリエイター と呼ばれる超常存在であり、 ボク
の世界の造物主。つまりは神。

だが 創作者 としては比較的若い存在であり、 神代戦争 に
は今回が初参加。意気込みはあるのだが、それが空回りすることも
見た目は少女と言っても過言ではないが、実際の年齢を数値で示
すと0が幾つあっても足りないため割愛。

腰まで届く黄金の神と宝石のような緋色の瞳が特徴。

身長は154センチくらい、体重は秘密。スリーサイズも当然秘
密だが、 ボク から哀想などと言われている。 が、当初 ボク
が見取れるくらい見た目は可憐なお嬢様タイプ。

真名を 可能性のN と言うが、その詳細はまだ不明。

「彼女に関しては、こんなところかね」

「紹介だけ見てみると本当に可憐ってのが合うんだけど……性格
か」

「本人の前では言わないことをお勧めするよ」

ワタシが見る限りではツンデレの素質は十二分にあると思うのだ
がね。

さて、次はメイドか。

名前：マーテル

種族：全般作業用サポート型生体人形

年齢：??（外見は18〜20才くらい） 性別：女

イメージカラー：どんな色にも染まる白

創作者 によつて生み出される生体人形の一つ。

Nによつて生み出されたマーテルは常に穏やかな表情を浮かべ、ボク のためにサポートをする。

黒髪を白の紐でくくり、服装は常にクラシックなメイド服。

身長は160センチくらい。体重は秘密だが、見た目よりは遥かに重いそう。

スタイルは抜群であり、ボク が絶賛するほどの巨乳である。

巨乳万歳。

お姉さんタイプだが、たまに小悪魔じみたことをする。

「メイドはまだ登場したてで情報らしい情報がないのが欠点かね」

「巨乳っていうのがわかっていれば十分！」

……なるほど、面白い。面白いが少しは自重したまえよ？

「善処します」

さて、次はお待ちかね。第三話で登場した 拠点 に関するデータだ。

好きだろう諸君も？ ワタシも大好きなのだよ。

「あれか……てかいいのか？ 拠点 の情報って結構重要なんじゃない……」

「構わんさ。なにより前回のものではかないのだからね、他の 創作者 たちもデータとしてだけなら、ほぼ全員が把握していると思っ
つていい」

それにつまらんだろう？

せつかくの超巨大兵器だ、紹介しないのは勿体ない。

「では、お見せしよう」

拠点名：ユッグ・ドラジール

種別：有機生体装甲型自律成長要塞タイプ

全高：約1,600,000キロメートル

総重量：不明（有機生体装甲製のため変動）

巨大な樹木そのものの形態をした 拠点

その身に茂る枝葉の一枚一枚が一種の防御盾の役割を果たし、戦闘になれば葉を散らせてあらゆる角度からの攻撃を防ぐことが可能。樹木の表皮からは結晶状の物体が生えているが、これはエネルギー貯蔵庫であると同時に攻撃手段の一つ。いざとなればミサイルのように射出することが出来る。小惑星程度なら纏めて塵にすることが出来るほどのエネルギー量を蓄えている上、内部で再生産可能。武装らしい武装は以上であるが、一番の脅威はその 再生能力 である。例えばどれほどの攻撃を受け傷を負っても常に修復すること
で無傷の状態を維持する。

この 再生 には限界はなく、例えば塵の一片からでも 再生 を

実行しようとする。

なお内部には種子のような形状をした無数の艦船を有しており、当然これらも 再生 機能を持ち合わせている。

戦闘スタイルは完全な超々長期戦型であり、 再生 にものをいわせて先に相手の戦力が尽きるのを待つてから一気に相手を押しつぶす。なおこの際は本体自身もその巨大な枝を動かし相手を直接攻撃するという拠点とは思えない生物的な行動までする。

前 神代戦争 優勝者の 拠点 であり、 大いなる B に連なる 創作者 と 接続者 の本拠地であった。

「これが前回の優勝者の 拠点 ユッグ・ドラジールの情報になる」

「改めて見ると……チートだな。なんだよ塵からでも再生するって……」

そんなに酷いかね？ これから君が闘う相手の中にはさらに傍若無人な能力を有してくるものもいるだろうに。

「ふむ……無知は時として幸せなことである」

「なに？」

「いやいや、こちらの話だよ。では次が最後になるね」

拠点名：ホルス・ソムトソール

種別：全域砲撃型機動要塞戦艦タイプ

全高：約650,000キロメートル（翼長は約1,400,000キロメートル）

総重量：不明

巨大な猛禽を思わせる形状をした 拠点

圧倒的な火力と装甲にものを言わせて相手を殲滅するのを主とする正統派。

鳥で言うところの翼や脚部にあたる場所には砲撃兵装が無数に備え付けられている。

その砲撃は一撃一撃が常に最大出力で何発でも連発出来るようにされており、その砲自体も 空間破碎兵器 の一種であるため、装甲や生半可な防護障壁ではなんら意味を持たない。

最大の特徴は装甲自体が持つエネルギー吸収機構であり、どのような種類・種別のエネルギー体であれ、それがエネルギー体であれば吸収可能となっている。

最終戦では太陽を背にすることで常にエネルギー補充状態となっており、実質無限に戦闘を続行することすら可能であった（無論、時艦の損傷と艦内での新造戦力の生産を考慮してのことだが）

自身とよく似た戦艦を有しており、これらも猛禽ほどではないが無数の艦砲を備えた純粋な戦闘艦であった。

戦闘スタイルはシンプルであるがゆえに打ち破りにくく、最終戦以前の戦闘では圧倒的な火力で真正面から全て薙ぎ払い突き進んでいる。

惜しむらくは最終戦の相手との相性の圧倒的悪さであろう。それが無ければ優勝していたのはこの猛禽を操る 接続者 であつたかもしれない。

「以上が今のところ判明している 拠点 の情報だよ」

「やっぱり最終戦まで残るだけあって凶悪だな……てかシンプル過ぎるのが相手に取ってもプレッシャーになることもあるか……」

「決して弱くはなかったが、悲しいかな相手が悪すぎた。もしも砲撃の種類が塵一つ残さず相手を消滅させるような…… 情報抹消型のものならば、立場は逆転していただろう」

まあ、それでも無理だったろうがねえ。

伊達に B に連なる存在ではないのだから……

「——で？」

「なにかね？」

「ボク はこれからどうなるのさ？ 紹介するのは今ので終わりなんだろう？」

「ああ……安心したまえ。すぐに戻るさ」

せつかちなのはいけないな。若いからこそだろうが、しかしせつかちなはいけない。

常に穏やかな心で今をあるがままに受け入れる精神を持ってほしいものだ。

「（マジっぜえ……！）」

「やれやれ仕方がない。では帰リたまえよ」

もつともここでの記憶は残らないがね。

「え？」

「では、次回があるならその時もよろしく頼むよ？」

あれば、だがね？

「ちょっとマテ——！」

「では……御機嫌よう。君の織りなす物語を楽しみにしているよ——」

さて……ワタシの出番はここまでだが……あなた方はもう少しこの喜劇に付き合っていたきたい。

彼らがこれから生み出す物語は、至高の物語となるか、はたまた貴方方の記憶にも残らないような駄作となるかはワタシにも分からないが——なあと、退屈はさせないよ。

では、親愛なる観測者 諸君、貴方方も——御機嫌よう。

拠点完成！そして不安の　ボク　（前書き）

仕事でなかなか執筆が……

今回はやっと拠点完成な話です。やはり説明的な文が多い罫。

早く戦闘シーンとか入りたい。

拠点完成！そして不安の ボク

「ふうー満足満足——、紅茶と羊羹の組み合わせはまた絶妙ねえ。あたしの好みを理解した良い仕事だわ」

「ウフフ、お褒めにあずかり光栄ですNさま」

Nがなんとも珍妙な組み合わせで「しあわせえ」な表情をしてまったりしている。

いや、たしかに悪くない組み合わせだと ボク も思っけど……
そこまで幸せそうな表情をするほどかとも思う。

とは言え実際マーテルさんが用意したものはどこかの店に出しても可笑しくないレベル——いや、ボク はそういった店には行ったことはないけれど——だった。特にあの甘さを抑えつつもしっかりと素材の旨さを引き出した羊羹は、今も ボク の舌にしっかりと記憶され——

「——ん？」

……あれ？

ボク ……お茶飲んでるよな？ いや飲んだはずだ。マーテルさんの淹れてくれた紅茶とお茶菓子を ボク は食べた——はずだ。食べた、よな？

なんだろう。食べたということは覚えているのに、その味についての記憶だけが妙にぼんやりとしている。

なんとも釈然としない感覚に頭を捻りつつ——

「それでは若さま。あらためて拠点作りの準備を致しましょう」

「あ……うん、ヨロシク」

……まあいいか。

なにか忘れていているような……そんな気分は好きではないが、いまは他にやるべき事がある。

神代戦争　を始めるための第一歩、本拠地の準備があるのだから。

「それでは若さま、　S・Y・R　を起動させてください」

「ああ」

言われて　ボク　は黒の立方体　S・Y・R　を起動する。

「ではご説明いたします。まずは先程ご覧になったイメージ——
——ステータス画面とお呼びしますが、その下の項目に　開発・生産
とございますね？　そちらを選択なさってください」

ふむ……　ボク　はマーテルさんの指示通りに　開発・生産　の
コマンドを選択。

すると次にイメージとして現れたのは無数の数字。0と1の群れだ。それも視覚化された。

「……それで？　拠点作りつてのはどうすればいいの？　さつきもNに言っただけ、一から作るっていつても　ボク　にはその手の技術や知識なんてないんだけど」

と言うか、学生の身分でその手の知識を持っている奴はそうそういないと思う。

……いるところにはいるんだろうけどさ。

「フフ、ご安心を。これから若さまにさせていただくのは、とても重要ですが簡単なことです。端的に言えば——イメージしてください」

イメージねえ……

「そう。ご自身が望まれる理想の形態。最高の守りと、最強の攻め。それらをイメージなさってください。それ以外のことは全て私が補佐いたしますから」

拠点は接続者の想像力で作られる……最初のNの説明にあったが、まさかそのまんまのことをするとは。とは言え——

「イメージねえ……」

「いきなりでは難しいでしょうか？ では一つアドバイスを。若さまがこれまでやってきたゲームや、見たことのある本やアニメなんかを頭の中で思い浮かべてみてください。その間に私が若さまの認識として最も深く記憶されているものを引き出しますので」

「うーん、良く分からないけど……」

最近見たのってなにがあったけな……ここ最近正直レポートだ何だで自分の時間を有意義に使えてた記憶がない。これが中学時代はたまた高校時代なら、色々見た記憶がぱっと思いつかぶんだろぅが……あー、大丈夫かな？

「はい大丈夫ですよ。と言いますか、終わりました」

「はやっ!？」

早いよっ!

イメージしろって言葉からほんの数秒で作業は終わったらしい。

「記憶の検索作業は、条件さえ満たせば難しくはありませんから。特に私のように補助作業に特化している生体人形なら、この手のことはお茶の子さいさいなのですよ」

えへん——とその大きな胸を揺らしてどこか誇らしげなマーテルさん。

ああ可愛いなあ。てか胸が……揺れますね。眼福眼福。

「それでは若さまのイメージも採取しましたし、次は拠点の基礎と外装に関してですわ」

説明しますね、とマーテルさんが言う。

曰く、この基礎と外装の作業とは、つまりは拠点の骨組みと表面を覆う基本的な装甲を、どのような素材で作るのかと云うことだった。

「素材？」

「そうですねえ……基本骨子および 拠点 の表面装甲の素材候補としては、軽量かつ強度・柔軟性に優れ精神感応金属でもある オリハルコン、そのオリハルコンを特殊錬成して軽度の修復機能を備えた ヒレイロカネ 日緋色金、単純な物理的硬度・強度では最高値を持つ

アダマース ——」

結構あるな……どれも元の世界では一度ぐらひは聞いたことのあるような有名どころばかり——まあ、小説やゲームに登場するような架空のものだけだ。

いまさら架空金属の一つや二つ出てきたところで驚きはしない。

「他にも 神珍鉄 や要求Pも高いですが トウルーメタル、ラフメタル と言う特殊素材もありますけど……」

うーむ難しい。

こつも種類があると悩むな……と言っても方向性だけは、実はもう ボク は決めていた。

「マーテルさん。こうなんて言うんですかね、それその物の強度や硬度は控えめでいいんですけど、秘匿性っていうか隠密性っていうか、拠点その物の存在感を薄くするような素材？ そう言うのってないですか？」

あー……、説明下手だな ボク

「つまりステルス性を備えた素材をと言う事ですね」

「あ、そうです」

簡潔ですねマーテルさん。まあそう言う事ですけど。

ボク の考えはこうだ。

この 神代戦争 では単純な物質的防御力はまるであてにならない。

あの記録映像の光景でも思ったことだが、あの巨樹は自身の装甲

ではなく再生能力を優先した設計をしており単純な装甲強度では猛禽を下回るだろう。にも拘らず、最終的にはその再生能力によって圧倒的火力を有した猛禽を打ち破った。

猛禽にしてもあの威容を見るに相当分厚い装甲を有していただろうに、最後にはそれを破られて爆散している。

単純な装甲の厚さが戦闘の勝敗を決めるわけではない——と言うのが ボク の結論だった。

ましてや 空間破碎兵器 や 情報抹消兵器 なんてもものの存在がある以上、どれだけ装甲を分厚くしようが意味はない。

「……ちよつと待ちなさい。なんであんたが、そんな殲滅兵器クラスの名前を知ってるのよ!？」

「え？ それは——」

——わからない。

おかしいな…… ボク はそんな兵器の名前を誰から聞いたんだ？ Nの反応を見る限り彼女ではありえないし、マーテルさんでもないだろう。

記憶の中にぽつんと孤立して存在する出处不明の知識——つ、なんだ？ 頭が痛い……

「あ、大丈夫ですか若さま？」

「（……まさか別の創作者からの干渉が？）……いいわ。今はそのことは忘れて。続き、しましょ？」

「あ、ああ……」

頭痛は治まったが、気持ち悪い。吐き気がする類の気持ち悪さで

はなく、思い出そうとして思い出せない——そんな気持ち悪さ。さつきも同じことがあったな——とにかく、今はNの言う通り作業の方を進めよう。

「それで、どうなんです？ そう言う素材ってありますか？」

「そうですねえ……これなどは如何でしょうか？ 黒色金属 ブラック・ラピュラス 名前の通りその金属色は純粹な黒に近く宇宙空間での視認を難しくし、さらに素材そのものの特性といたしましてレーダー波などを吸収してしまうという特徴を備えております」

ピンポイントですありがとうございます！

なんともご都合主義だが、あるのなら問題ないってことで。

とは言え、流石に骨組みまで全部同じ素材で作るってのは抵抗があるの——

「それじゃあ土台の重要な部分にだけ アダマース を使用して、残りの部分——表面装甲全面に ブラック・ラピュラス を使用する形で」

「かしこまりました」

一部分にだけ使用するなら必要P tが高かろうと大して変わりはないってことで。

「けち臭いわね」

「せめて節約してると言え」

まあ實際けちけちしてもいられないんだろうが…… ボク にもそれなりに考えがあるんだ。

「では次に内装に関してですが、若さまのご要望は？」

あ、それなんですけど、マーテルさんちよつと……ゴニョゴニョ

「——はあ……確かに可能ですわ。ですがそれだけだと効率が悪くなりますねえ」

「そこは技能でどうか——」

「でしたら拠点だけでなく、戦力群にも最初から——」

「なるほど、となると……」

ひそひそと、マーテルさんと秘密の会話。

「……なんでそんなこそこそしてんのよ？」

そりゃまあ——Nに聞こえないように？

「ああ——って何だよ!？」

ひーみーつ——、いや決してけち臭いとか、厨二病がどうかと言われた腹いせではなく——少しはあるが——純粹にいまは秘密だ。

「意味わかんないわよ？ あたしにだって関係あるんだから教えなさいよ!」

「だが断わる！」

「フフ—— Nさま、男の子の見栄ってやつですよきっと」

や、違いますけど。

「……後でちゃんと教えなさいよね」

納得するんだ、それで。

「ま、こうご期待ってことだな」

まだ出来るとも分からんし。

「では若さま、続き、しましょうか？」

はい……あれなんだろう、然り気無くエロいセリフに聞こえ——
——「はい？」なんでもないです。

天然？

そんなこんなでおおよそ三時間後——長いと見るか短いと見るかは自由だが——

やっと…… 拠点 が完成しました！

とりあえず今使えるPtを—— 技能取得で使用する予定の分

だけ残し——あるだけ注ぎ込んだ。まあおかげでP tはすっかりかんで懷が寒いが、現時点でボクが考えうる最高を設計したつもりだ。

ではさっそく紹介しよう。これがボクの——ボクたちのホーム。

それは、真黒き神座す月か——

その拠点名は、グラズヘイムにした。名前は某神話から。意味は喜びの世界だ。形状としてはシンプリな球体型。

表面装甲は全面を黒色金属 ブラック・ラピュラス で構成している。光学的手段およびレーダー波等による索敵を極限まで軽減するように設計している。

単純な装甲防御力は紙も同然だが、それは エネルギー偏向フィールド による防御力場で補っている。

全高はおよそ3000キロメートルほどだ。防御力の薄さは大きさをカバー——、とは言わないが、このくらいの大きさなら少しのダメージくらいなら耐えられる……はず。

デザインに関しては、某銀河戦争の某最終兵器や某怪獣王に出てきた某星人の母艦、はたまた某銀河天使に登場する各種○の月を参考になっている。

その姿はまさに黒い禍星と言ったところか——自分で言つててちよつと恥ずかしくなった。

武装は近接防御用のものを除いては一切装備していない。拠点そのものが戦闘に直接介入するようになっていたら終わりだろうと思

ったからだが——正直に言えば、内装や下記で語る戦力の設計・開発にこだわり過ぎて武装まで回すP tが無くなったからだ……はは、笑えよ。

「あつはつは！ ばーかばーか！」

「そこっ！ マジ笑いするかよ!？」

「あらあら、お二人とも……」

マーテルさんに呆れられた……ショックだ。

「あはは……！ ごめんごめん！ にしても……随分と面白みのないものになったわねえ。マーテルとこそこそ話しあってたわりには本当に平凡。拠点 自体の秘匿能力は高い方だけどそれだつて絶対つてわけじゃないし、火力も防御力も無いも同然じゃない？」

「ふふふ……まあ、まだ内緒つてことで」

ちよつとした隠し球……と言うほどではないが、 グラズヘイムの最大の特徴とでも言うべきものを、 ボク はまだNに話すつもりはない。

……まあ、まだ全部構築が終わってないからつてのもあるが。こういうのは、一番おいしいシーンで公開するのが一番！

「クスクス、若さまはなかなか面白い発想力の持ち主でございますよNさま」

「ふーん……ま、マーテルがそう言っんならちよつとは期待してあ

げるわ」

ボク のは信じなくて、マーテルさんのは信じるか！——
——そりゃそうだよな。

ま、まあとにかくにも、 拠点 の概要は以上だ。だが、ボク が設計したのはそれだけじゃない。

拠点 と同時にそれを防衛する戦力も開発を進めていた。

まずは戦力の要となる艦船から紹介しよう。

ステルス攻撃空母・ フリースト

まあ名前の通り空母だ。何を艦載するのは下で説明しよう。

見た目とにかく縦長な艦だ。全長はおおよそ10000メートル

——10キロなわけだが————ほど。 グラスヘイム 同

様に装甲素材として ブラック・ラピュラス を使用しているため艦自体の秘匿性能は比較的高い。

空母にや火力なんていらんだろう————という ボク の自論

で武装は一切施していない。

が、その代わりとして母艦としての機能はもとより、中継基地的役割まで担うことが可能なほど内装には手を施している。

次に フリースト に足りない火力を補うためのものと考えて出来たのがこれだ。

突撃駆逐艦・ ゲイレルル

槍のような形状をした駆逐艦という種別の戦闘艦だ。

全長は約300メートル前後。

駆逐艦————ま、簡単に言えば速力を重視した小型軽量の艦な

わけだが、この ゲイレルル もまた速力を最大限重視した設計だ。

とにかく最前線で持てるだけの火力をばら撒いて速力で翻弄する

——という目論見なのだが、実際上手くいくかどうかは別だ。

武装は艦上部に二基、下部に一基装備した 二連装凝集激光砲

——まあ要はレーザーだ——のみだ。

速力を最大のうりとしているため、火力自体は低くて構わない。

ま、数で勝負つてところかな。

そしてこっちが フリースト に艦載する予定の機動兵器群だ。

汎空間戦闘用亜人型哨戒攻撃機・機体名は ヘルヴォル

哨戒攻撃機と称しているように機動性と索敵能力、攻撃性能に偏

重した設計をしており、装甲はぶっちゃけ皆無と言っている——

——まあ、 グラスヘイム 同様、それ自体の耐久力は 神代戦争
では重要視していないからそうなったわけだが。

外見は亜人型と表記している通りに人型に近いが人型ではない——

——と言った趣だ。具体的には人と言えば両腕・両脚、加えて肩
部のある部分は大型の加速・推進器になっており爆発的な加速力が
引き出せるようになってる。あ、ちなみに尻尾な感じの部分も付
けている。一応姿勢制御用と言っているが、ぶっちゃけ ボク の
趣味だ。

武装として近接戦闘用の アダマース製大型対艦ブレード を両
腕・脚部にそれぞれ四つ。そして長距離砲撃用として胸部に一門の
凝集激光砲、機体各部にも小型だが同じものを装備させてある。
基本は流線形を基調としたデザインであり——見ようによつ
ては結構トゲトゲしい部分もあるが——その装甲色は白を基本
としている。

ちなみに全高は——結構抑えたつもりだが——80メー

トルほどだ。意外と大きい感じだが、とにかく グラスヘイム も
フリースト もキロ単位なだけに、比べると豆粒同然という事実。
こっちも当然数で勝負になる。 フリースト には最低五百機前
後を乗せることが可能だ。

—— え？ 見た目が明らかに悪役ちつく？ 主人公が使用す
る感じがしない？ はっはっは—— いやあ、 ボク こう言う
デザインの好きだしさ。

「あんたの趣味はどうでもいいけど、あたしは割りとき好きよこっ
いの」

「……デレ期ですか？」

「そんなわけあるか！ ただデザインを褒めただけよ！」

…… そんな全力否定しなくても……

「とは言え、何となくあんたのやりたい戦い方は予想出来たわ」

ほほう？ 自信満々ですねNさま？

「秘匿優先の拠点に空母。量産前提の艦載機…… 予想出来なきゃそ
れこそ馬鹿でしょ？」

なにを当たり前のことを、と言い放つN。

いやいや…… その発言は何人かの人を敵に回しそうで怖いんだが
……

「でも—— 実際やれるの？」

「……正直言つて、やってみないと分からないってのが本音、かな」

「ふん……なんとも不安にさせるセリフねえ」

そう……やってみなきゃ分からない。ボク がやろうとしていることが、実際どこまで通用するかいまいち自信が持てない。

はつきり言つてしまえば、不安を通り越して——怖い。

逆に言えば、ボク がやりたいことを実現する、その為の グラズヘイム であり、各戦力群なわけだが……それを考えても怖いものは怖い。

「——でしたら」

そんな時だ。

マーテルさんがその提案をしたのは。

「私に良い案がございます」

「良い案？」

「はい。Nさまは若さまの戦術が本当に通用するか不安……若さまはご自身の考える戦術が正しいのが不安……そう思っておいでなのでしょう？」

であるなら——、と真面目かつ、どこか悪戯っ子じみた声色
でこう彼女は言った。

——模擬戦をいたしましょう。

拠点完成！そして不安の　ボク　（後書き）

ちなみに、艦載機こと　ヘルヴォル　は某ゲーム的なステータスだと、運動性140、装甲800くらい……まあサイズはしだからな
んとも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4270o/>

《ボク》と《チート》と、神の代理戦争

2010年10月29日12時35分発行